

---

# ファンピールイェーガー

キムン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンピールイエーガー

### 【Nコード】

N4716P

### 【作者名】

キームン

### 【あらすじ】

対吸血鬼の専門家、ケルン大聖堂の修道女シュレディンガーは今日も人間の平和を護るために吸血鬼狩りに勤しむのであります……ゴシック建築の建ち並ぶドイツを舞台にしたヴァンパイア・アクション、出来るだけ夜遅くにお楽しみ下さい。

## 吸血鬼狩りの修道女

冬、と言うのは実に寒い。

冬が寒いのは何処でも同じかも知れないが、ドイツの冬は特に寒い方に分類しても良いと思う、山の中だからなおさらだ。

ケルン大聖堂、ドイツ連邦共和国ノルトライン＝ヴェストファーレン州ケルンにそびえ立つ世界最大のゴシック様式の教会、そこが私の職場であるが出張先はドイツ中の田舎や大都会、時には国外へ出たりもする。

そしてこの私、ローマカトリック教会の修道女にして吸血鬼狩りファンヒールイエーガーの専門家、ヒルデガルド・カミラ・シュレディンガーは今まさに仕事中である。吸血鬼と言うものは十字架を握りしめても十字路に灰を撒いても、天井からニンニクを吊り下げ聖水をそこら中にぶちまけたとしても来る時は来る。

厄介な事に、吸血鬼は初めて行く所には扉や窓を開けてもらうかお入り下さいと声を掛けられるか、とにかく招かれないと入れないのだが一度行ったことの有る場所なら魔法の様に現れるものなのだ。吸血鬼が潜む小屋結界を貼り終えた私は、腰に下げた拳銃を抜きスライドを引く。

対吸血鬼用改造型シグザウアーP229、9mm法儀済純銀弾核、装弾数は13+1発、頑丈で良く当たり反動は小さい、なんと理想的なことか。

拳銃を構えたまま扉を蹴破る、吸血鬼の姿は見えない。

両腕で構えた拳銃を右手に持ち替え、左手でナイフを抜き前に構えて中に入る。

ふと目に入った鏡に目をやる、鏡には私――長めの金髪に青い目、くたびれた表情の私しか映っていないようにみえるが何かがおかしい、何が……血だ、私の後ろで不自然に血が滴り落ちている、まるでそこに口が有るかの様に……

「吸血鬼は鏡に映らない”ってかあ！」

振り向きざまにナイフを振るい、後ろに跳んだ吸血鬼に向けて発砲する。

吸血鬼は体を左右に振って弾丸を避け、両腕を前に伸ばして突っ込んでくる。

その腕を掴むと同時に足を掛け、突っ込んだ勢いを利用して地面に叩きつける。

うつ伏せの吸血鬼に跨り、両腕を拘束して自由を奪い、心臓部に拳銃を突き付ける。

「我らは人々に光明を与え幸福の教えを謳う者なり、我ら悪鬼に怯えるか弱き者共を遙か天高き神の国へと導かん、其れが為に汝ら人の世に迷い込みし魔の者共に神罰を与え撃ち滅ぼさん、Amen」  
引き金を引くと同時に返り血がほとばしる。

銀で心臓を撃ち抜かれた吸血鬼の体が崩れ落ちるのを確認し、私は小屋を後にした。

## 増員

ステンドグラスに朝日が差し込み、聖書の内容を象ったモチーフが礼拝堂に影を落とす光景はなかなか幻想的だ。

昨日は夜の十時にもならないうちに仕事が終わったから良いものの、真夜中の二時や三時まで長引くと朝の祈りの時間に跪いたまま眠りそうになる、こういう仕事なので日中の睡眠が許されているのだが、時間の決められた礼拝には出なくてはならないのだ。礼拝を終え部屋に戻ろうとした所を、年老いた司祭に呼び止められて振り返る。

「シュヴェスター・シュレディンガー、ケルン大司教猥下が呼びびですよ、すぐに向かつて下さいね」

そういえば、赴任してすぐの頃は大司教の部屋の扉を叩く度にひどく緊張したものだ。

入室の許可を得てから部屋に入った先に待っていたのは華美な法衣に身を包んだ大司教と、随分と懐かしい顔の修道女、そして八十を過ぎたであろう老人だった。

大司教はにつこりと微笑んで喋りだす。

「シュヴェスター・シュレディンガー、昨日は良くやってくれたね。この前の集会でケルン管区の司教達は皆君の普段の仕事振りを誉めておった」

思わず頬が緩みそうになるのを堪える、司教達に名指しで賞賛されるのはそう有る事では無い。

「しかし出来るだけ表には出ないように隠蔽しているが、最近吸血鬼関連の事件が増加の一途を辿っている、君も勿論良くやってくれているが限界も有るだろう？　そこで増員だよシュレディンガー。片方は君の馴染みかな？」

懐かしい顔の修道女、リア・エリザ・アーベルは中学、高校で机

を並べた仲だ、そして卒業後の進路もぴったり一緒だった。

ドイツ連邦警察対テロ特殊部隊GSG 9、私とリアの前職だ。

近年急増する化け物による被害に対し人手不足に悩むヴァチカン  
は、信仰に厚く戦闘力が高く、なおかつ機密を保持出来るような人間  
を吸血鬼狩り、ファンピールイーガーとして引き入れているの訳  
だ。

私は大司教に促されて老人の方を見る。

僧服を纏った老人は、年寄りとは思えない程に真つすぐと立って  
いた。

「カール・グスタフ・ゴルトベルグです、以後よろしくね」

なかなか味わい深い声だ、しかしゴルトベルグ、金の山なんて豪  
勢な名字ではないか。

大司教がゴルトベルグ老人の紹介を続ける。

「彼も君達と同様に他の組織からの引き抜きだよ、まあ、彼の場合  
は組織が壊滅してからこっちに來たのだからね」

老人は相変わらず真つすぐ立っている、大分屈強な様だ、世代的  
には二次大戦に参加しているはずだが……

「彼はドイツ第三帝国武装親衛隊山岳獵兵、第一山岳師団一等兵の  
上級狙撃手だ」

第一山岳師団と言えば精銳部隊だ、もし戦後すぐに教会の所属に  
なったのであればかなりのキャリアになる、戦中の兵種を考えれば  
やはり狙撃手なのだろうか。

「さて、吸血鬼を狩る事に関しては私は門外漢だからね、後は君達  
で理解を深め合ってくれ。それでは、健闘を祈っているよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4716p/>

---

ファンピールイェーガー

2010年12月24日02時25分発行